

で、脂肪を必要とするから炊事の方に聞いてみるのとことであつたが、炊事にも全然ないとのこと、二、三日中に脂肪をみつけると言われた。

翌日は、気温が下がり寒さが厳しいので作業中止となり、午後より炊事周囲の整理の使役に出された。炊事の裏側には我々のスーブの材料となつた豚、牛、羊の頭蓋骨がたくさんあり、何気なく大きな牛の頭蓋骨の上顎をタボールでたたいて壊すと、鉛色でバナナくらいの脂肪のようなものが出てきた。一緒に使役に行つた戦友に見てもらつたところ、脂肪だと言つて頭蓋骨を五個くらいに割つて、飯盒の代用している缶詰の空き缶に入れ持ち帰り、夕食の際、戦友がスーブで溶かして見ると、ギラギラとした脂肪が浮いていると言つて、私と一緒に飲んだ。その翌日軍医に報告すると、毎日食事の際にスーブに入れて飲むようにと言われた。一週間ばかり服用しているうちに目は夜間でも見えるようになった。

あの路盤工事のときもし戦友が戻つて助けてくれなければ、また時間的にもおそかつたらシベリアの寒さ

に負け死んでしまつたかも知れない。体力も入ソの際より弱り昭和二十三年の五月、下痢とカゼに倒れ、入院を約一か月して病院の生活を送つた。

退院後は軽作業をするようになり、昭和二十三年七月タモイ要員となり、八月中旬にナホトカへ送られ、同年八月二十日、栄豊丸に乗船して無事舞鶴に上陸した。その日は八月二十四日であつた。

シベリア抑留生活から

岩手県 岩 功

シベリアの酷寒は予想外に厳しい。ノルマを要求されての強制労働をしいられ、辛うじて越冬でき昭和二十一年の春を迎えた。

私の属するロストフカ収容所でも、例によつてソ連軍の身体検査（裸体にし尻の肉づき等も大きな判定基準）で三大隊に入った。一、二大隊が健康者で、割り当てられる作業も当然重労働作業が多く、第四大隊は

いわば病弱者で、入院入室の集合で休養等も与えられていた。

さて我々の三大隊は、收容所内の雑役に引き回された。衣服の消毒場の建築の補助作業、医務室（医療機関と言うが設備は貧弱）の患者の食事運搬、汚染衣類等の洗濯整理等多種多様な作業が次々と待っていた。

戦友よ安らかに眠れ

この三大隊の労役に戦友の埋葬があった。飢えと寒さとにかく一冬を越したものの、栄養失調、発疹チフス等で次々と倒れていく。死亡した戦友を車に積み（そのときもあった。）およそ六キロ離れた場所へ歩哨監視で運んでいく。別の隊の者が専門に墓穴を掘っている。縦が一メートル横二メートル深さ約一メートルの箱形に掘るのだが、岩のような固い凍土をツルハシ、鉄の棒（金てこふうのもの）スコップで掘るのだが、能率が上がらず、死人の方に追いまわされる格好だった。一つの穴に八人を埋めることになっており、どの死体を見ても骨と皮ばかりにやせ衰え、見るにしのびないようだった。

「本当にかわいそうだ。少しでも丁寧に……」と念入りに葬ってやろうと思っても、監視の歩哨に「早く早く」とせきたてられるので、全く不本意な埋葬に終わってしまう。遠い祖国の親がこの死に方を知ったら、どんなに嘆き悲しむだろうと私ども戦友は涙ながらのいやな作業だった。

このほか、便所清掃、汚物清掃、除雪作業なども次々割り当てられたが、ソ連軍の衛兵所前の除雪は特にうるさく、ほんのわずか残っても、むしろに似た敷き物で引かされたり、戸板に載せ、歩哨の叱咤を浴びながらさせられたりもした。

しかし、こんな作業も酷寒の中だけに日ごとにだれもが体力減退、不調を訴えながらふらふらの状態で体を動かしていた。私も体加減の悪いのがまんじきれず、願って検診を受けた。目の色から体全体が黄色で食欲が激減し、全身がすごくだるく、黄だんと認定された。

恐ろしい発疹チフス

四月十日、再診の結果、発疹チフスと言われ即時入

室となり、その日のうちに医務室に送られ、三大隊生活が終わった。そのころ収容所にはこの恐ろしい発疹チフスが流行していた。

私は、重い頭をかかえ医務室までようやくのこと足を運び、すっ裸にされ湯桶で全身洗浄をされ、消毒の後病衣を渡されたところまではうすばんやり覚えていたが、それから先のことははっきりした記憶がない。入室から半月ほどは意識もうろうとして、そのなすところを知らなかった。やがてその月の終わりになり、少しずつ意識が回復、体力も幾らかずつでも戻ってきた。寝台の上では用便が大変ということで、衛生兵の介護で下段に落としてもらった。

四月末といってもシベリアの風は冷たい。せつかくのペーチカの燃えが悪く、部屋全体に冷気が常に漂っていた。この寒い部屋にシラミ検査のために毎日婦人軍医が来ては、何のえんりよもなしにすっ裸にして調べる。いないと言っても検査はやめずに実施する。これと同時に衣服、寝具の消毒がしばしばで、寒い中だけに閉口した。もちろんすっ裸で仕上がり待つので

大変だった。チフスの源はシラミだということで、不潔が悪いということで全身の毛髪をそり、衛生的にとせまられる。しかし、ここでは給食は一般兵に比べてややよく、スープ食、うるち米も少量まじったり、ミルク、ほしブドウなども、まれではあったが入ったこともあった。ただ熱があるため、のどが渴き耐えられなかった。飯盒の底を洗った湯を大事に使い、最後には飲んだ。中には我慢し切れずに掃除（防火）用水を盗飲し、衛生兵にひどく叱られたりする者もいた。たれ流しをするわけではないが、床ずれで悩まされる者も続出した。私もやせこけたためか、その一人で、長い間治らず苦しんだ。

このような療養生活から回復し退室する者、薬石の効なく死んでいく者も少なくなかった。この発疹チフスで倒れた者が多く、死亡者は衛生兵の手で担架で廊下に運ばれ、やがて三大隊の手で（前述）遠い荒地の墓穴に運ばれたのだった。

幸い私は九死に一生を得て、命はうちとめたものの、退院にはほど遠くゲルマン病院に入院し、さらに療養

することになったのである。

バム鉄道敷設

岡山県 大水 操

私は鶴になりたい。

零下三十度の寒空を南に向かって飛んでいるあの鶴の一群は、毎晩夢に見る故国へ飛んで行くのだろう。ああ帰りたい。郷里、両親、兄弟を思い、涙が滂沱としてはおをぬらす。ああ帰国したい、帰りたい。

時は昭和二十三年一月、反動分子として私は第一地区サラワッカ第二一八懲罰分所より第四地区バム鉄道建設地ウルガル四一〇分所に転出。五月まで四一〇分所分遣隊ウルガル貨物倉庫に作業員として勤務。責任者東京出身宮原軍曹、北九州出身「イツキ」軍曹で、約三十人くらいと思う。

一般ソ連市民、抑留日本人の糧秣貨車おろし、積み込み作業をした。荷おろしが主であったが、何分冬季

で毎日零下三十度、四十度で、凍りつく寒さの中ではろばろのロシア服、粗末な手袋。小麦は三十トン車ばら積み、扉の下面に十センチくらいの正方形の穴、これより麻袋を受け六十キロほど入れ、板坂の二階製粉所へ担ぎ上げる。やせ細った体でふらふらで、もうここで死か。死にたくない、無念だ、涙がポタリ。情ない、どうしてこんな目に遭うのか。ああ一目両親に会いたい。しかし、もう会えないかもしれない。

昭和十六年二月、現役入隊してより八年目、自分の年を数えてみると二十八歳。ここウルガルで最後か。覚悟しなければならぬが、残念無念だ。ふと上空を見上げると、寒空にザーっと物すごい羽音、鶴の一群が南を指して飛んで行く。ああ鶴になりたい。そして一路南の故国に飛んで帰りたい思いで、涙が流れる。振り返るとみんな泣いていた。思いはみな一緒だ。

肉おろしは、目をむいた牛の頭だけ。角を持って背負い地下倉庫へ。少し暖かくなって牛の臓腑おろしには閉口。上衣のロシア服は脂でべたべたで、大変臭い。また関東軍より押収したみそだるをおろすと、「これ